看護学生の社会的スキルと職業的アイデンティティの形成に関する研究

－専門領域別実習前後および学年別の比較－

小沢久美子　久保宣子　切明美保子　日當ひとみ　古舘美喜子　蛭田由美

要旨

本研究は，看護学生の社会的スキルと職業的アイデンティティにおける専門領域別実習前後および学年別による違いを明らかにすることを目的に看護学科学生 58 名に 4 年間縦断的に質問紙調査を行った。その結果，専門領域別実習前後では，職業的アイデンティティの「看護観の確立」「社会貢献の志向」が実習前より実習後で有意に得点が高かった。社会的スキルは専門領域別実習前後で有意差は認められなかったが，実習後に得点が高くなっていた。また社会的スキルは職業的アイデンティティと関連があった。学年別の比較では，職業的アイデンティティの「看護職を選択したことへの自負」が，1 年次が他の学年より有意に得点が高く，「看護観の確立」は，4 年次が他の学年より有意に得点が高かった。

キーワード：看護学生，社会的スキル，職業的アイデンティティ

Ⅰ．はじめに

日本看護系大学協議会[1]は，看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーの「ヒューマンケアの基本に関する実践能力」の一つに援助的関係を形成する能力を挙げている。

文部科学省[2]は，看護を提供するためには看護の対象との信頼関係の形成が第一歩であり，看護職として求められる基本的な資質・能力にはコミュニケーションと支援における相互の関係性があり，コミュニケーションが人々との相互の関係に影響することを理解し，より良い支援に向けたコミュニケーションを看護学教育で学ぶことを提示している。看護学教育において実践能力を修得するためには，実習は重要な位置づけであり，講義や演習で学んだことを実習で体験し，基本的な能力を獲得していく。

コミュニケーションは対人関係において欠かせない要素であり，コミュニケーションを成立させるためには言語的方法と非言語的方法（表情・動作・姿勢等）により，送り手と受け手がお互いの意図を伝達し，理解し合えることが必要である[3]。

庄司[4]は社会的スキルの定義を①学習される，②対人関係の中で展開される，③他者との相互作用の中で個人の目標達成に有効である，④社会的に受容されることとしており，コミュニケーション能力は，円滑な対人関係を築き，それを保持するために欠かせない要素である。

筆者らは，看護学生の人間関係の形成やコミュニケーションスキル，職業意識を高める教育の一貫として，看護学生の社会的スキルと職業的アイデンティティの形成の経年的変化に着目し，2016 年度に入学した看護学生を対象に縦断的に調査を行ってきた。

筆者らの 2 年次までの調査[5]では，1 年次より 2 年次は職業的アイデンティティの「看護観の確立」「必要とされることへの自負」が低くなる傾向にあるが，2 年次におけるボランティア

活動経験は社会的スキル，職業アイデンティティと関連があることが明らかとなっている。また，基礎看護学実習のコミュニケーションスキルと対人不安に着目した調査[6]では，コミュニケーションスキルは，基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱは「他受容」の得点が高く，「表現力」「自己主張」の得点が低いこと，「緊張」が高く，自尊感情と対人不安には関連があることが明らかとなっている。

これらのことから，看護学生が対象と円滑な対人関係を築き，職業意識を高めるためには，社会的側面だけではなく，心理的側面を合わせた支援が必要であると考える。

本研究では，大学 4 年間縦断的に質問紙調査を実施し，3，4 年次に履修する専門領域別実習前後および 1 年次から 4 年次までの学年別による経年的変化に着目し検討したので，その結果を報告する。

Ⅱ．研究目的

本研究の目的は，看護学生の社会的スキルと職業的アイデンティティにおける専門領域別実習前後および学年別による違いを明らかにすることにより，社会的スキルと職業的アイデンティティの形成における特徴を知ることである。

用語の定義：本研究での職業的アイデンティティとは，職業と自己との関連性の中で，職業を通して自分らしさを確かめ，どのように成長していきたいかという自己意識のことである。

Ⅲ．研究方法

１．研究デザイン

質問紙調査による量的記述研究デザイン

２．研究対象者

2016 年度に入学し，A 大学看護学科に 1～4 年次まで在籍している学生を対象とした。

３．調査方法

1 年次春学期 8 月，2 年次秋学期 11 月および専門看護実習（成人・高齢者・小児・母性・精神・在宅・統合）の前後において自記式質問紙調査を実施した。対象者に研究の趣旨，倫理的配慮について文書および口頭で説明した後，質問紙を配布し記入後にその場で回収，施錠可能な場所で保管した。調査期間は 2016 年 8 月～2019 年 9 月であった。

４．専門領域別実習について

①教育課程の位置づけ

専門教育科目，専門科目「看護の展開」「看護の統合」である。1 年次から 3 年次春学期までに以下の科目を修得していることを履修要件とする。

看護学概論，日常生活援助論，回復促進援助論，ヘルスアセスメント，看護過程論，看護倫理，基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ，成人看護学概論，成人看護援助論Ⅰ・Ⅱ，高齢者看護学概論，高齢者看護援助論，小児看護学概論，小児看護援助論，母性看護学概論，母性看護援助論，精神看護学概論，精神看護援助論，在宅看護学概論，在宅看護援助論，統合看護論，医療安全，看護管理等の専門科目

②科目構成

各専門領域別の臨地実習として，3 年次秋学期から 4 年次春学期の通年では成人看護学実習Ⅰ，成人看護学実習Ⅱ，高齢者看護学実習Ⅰ，高齢者看護学実習Ⅱ，小児看護学実習Ⅰ，小児看護学実習Ⅱ，母性看護学実習，精神看護学実習，在宅看護学実習を履修する。さらに，理論と実践の統合を目指し，様々な実践を総合的に学ぶことを目的に 4 年次春学期の各専門領域別の実習の終わりに統合看護実習を行う。

５．調査内容

質問内容は，対象者の属性（年齢，性別），臨地実習の達成感，社会的スキル，職業的アイデンティティである。

社会的スキルは，菊池（1988）が作成した「KiSS-18」を使用した。対人関係を円滑に運ぶために役立つスキルの程度を測定する尺度であり，18 項目からなる。「いつもそうだ」から「いつもそうでない」の 5 段階尺度で判定され，それぞれ 5 点から 1 点に評点化し，合計点を算出する。得点が高いほど社会的スキルが高いことを示す[7]。合計得点範囲は 18～90 点である。

職業的アイデンティティは，藤井・野々村・鈴木他（2002）が作成した「職業的アイデンティティ尺度」を使用した。使用にあたっては作成者の同意を得ている。この尺度の「看護職を選択したことへの自負」「看護観の確立」「必要とされることへの自負」「社会貢献の志向」の 4 つの下位尺度の上位 5 項目，計 20 項目を使用する。この尺度は「そう思う」から「そう思わない」の 7 段階尺度で判定され，それぞれ 7 点から 1 点に評点化し，平均点を算出する。得点が高いほど職業的アイデンティティが高いことを示す[8]。

６．分析方法

すべてのデータは数量化し基礎的集計を行った。KiSS-18 の 18 項目および職業的アイデンティティの 20 項目については信頼性を確認した。専門領域別実習前後の比較は Wilcoxon の符号付き順位検定，KiSS-18 と職業的アイデンティティとの関連は Spearman の順位相関係数，学年別の比較は Friedman 検定を行い，Friedman 検定で有意差が認められたものに対しては，多重比較（Bonferoni 法）を行った。統計処理は『IBM SPSS Statistics ver. 26.0 for Windows』を使用し，5%未満を有意水準とした。

７．倫理的配慮

研究対象者に調査の趣旨，匿名性，参加同意の自由，協力拒否の自由，成績評価には影響しないこと等を文書でおよび口頭で説明し，回答の提出でもって同意したことと判断した。本研究は八戸学院大学・八戸学院大学短期大学部研究倫理委員会の承認を得た（No.16-06）。

Ⅳ．結果

１．分析対象者の概要

A 大学看護学科に 1～4 年次まで継続して在籍し，研究への同意が得られた学生は 58 名（男性 7 名，女性 51 名）であった。専門領域別実習の達成感では，有 57 名（96.6%），無 2 名（3.4%）であった。

２．KiSS-18 と職業的アイデンティティの内的妥当性

KiSS-18 の 18 項目について Cronbach's α ＝.882～.900 であった。職業的アイデンティティの 20 項目について Cronbach's α＝.940～.958 であった。4 因子の Cronbach's α は，「看護職を選択したことへの自負」が.882～.924,「看護観の確立」が.831～.943,「社会貢献の志向」が.892～.908,「必要とされることへの自負」が.870～.961 で内的妥当性は高かった。

３．KiSS-18，職業的アイデンティティの専門領域別実習前後の比較

１）各尺度の専門領域別実習前後

専門領域別実習前後の比較では，職業的アイデンティティの 4 因子のうち「看護観の確立」「社会貢献の志向」において実習前より実習後で有意に得点が高かった（順に $p<.001$, $p<.01$）。また「看護職を選択したことへの自負」「必要とされることへの自負」には有意差は認められなかったが，実習後は実習前より得点が高くなっていた。

実習前後ともに「社会貢献の志向」の得点が最も高く，「必要とされることへの自負」の得点が最も低かった。 KiSS-18 では実習前後で有意な差は認められなかったが，実習後に得点が高くなっていた（表 1）。

２）KiSS-18 と職業的アイデンティティの関連

専門領域別実習は実習前後ともに，KiSS-18

は，職業的アイデンティティの「看護職を選択したことへの自負」「看護観の確立」「社会貢献の志向」「必要とされることへの自負」との間で有意な正の相関が認められた（r=.56～.64, p<.001）（表 2）。また，専門領域別実習は実習前後ともに，KiSS-18 は，職業的アイデンティティの「看護職を選択したことへの自負」「看護観の確立」「社会貢献の志向」「必要とされることへの自負」との間で有意な正の相関が認められた（r=.36～.53, p<.001）（表 2）。

表１　各尺度の専門領域別実習前後の比較

median（25～75percentile）

カテゴリー / 変数	専門領域別実習 実習前	専門領域別実習 実習後	P
職業的アイデンティティ	α＝.957	α＝.958	
看護職を選択したことへの自負	4.5（3.8～5.4）	4.6（3.9～5.6）	n.s.
看護観の確立	4.4（4.0～5.2）	4.8（4.4～5.4）	***
社会貢献の志向	5.2（4.6～6.0）	5.4（5.0～6.0）	**
必要とされることへの自負	4.2（3.7～5.0）	4.4（4.0～5.0）	n.s.
KiSS-18	α＝.883	α＝.900	
	61.1（56.0～68.0）	62.3（56.7～69.0）	n.s.

※ Wilcoxonの符号付き順位検定　　n=58

※ **: P<.01, ***: P<.001

表2　専門領域別実習におけるKiSS-18と職業的アイデンティティとの関連

n=58

カテゴリー / 変数	KiSS-18 専門領域別実習 実習前 r	実習前 P	実習後 r	実習後 P
職業的アイデンティティ				
看護職を選択したことへの自負	.59	***	.52	***
看護観の確立	.64	***	.53	***
社会貢献の志向	.56	***	.45	***
必要とされることへの自負	.60	***	.36	***

※ Spearmanの順位相関係数

※ **: P<.01, ***: P<.001

３）KiSS-18，職業的アイデンティティの学年別の比較

社会的スキルの KiSS-18 と職業的アイデンティティの学年別の比較を行った。その結果，職業的アイデンティティの「看護職を選択したことへの自負」「看護観の確立」に学年間で有意差があり，「看護職を選択したことへの自負」は 1 年生が 3，4 年生より（順に p<.01，p<.05），2 年生が 3 年生より（p<.05），有意に得点が高かった。「看護観の確立」は，4 年生が 1，2，3 年生より有意に得点が高かった（順に p<.05, p<.001, p<.001）。また有意差は認められなかったが，どの学年も「社会貢献の志向」の得点が最も高く，「必要とされることへの自負」の得点が最も低かった。KiSS-18 では学年間で有意な差は認められなかったが，1 年次から 4 年次にかけて得点が高くなっていた（表 3）。

表3　社会的スキルと職業的アイデンティティの学年別比較

median（25～75percentile）

学年＼変数	社会的スキル KiSS-18	P	職業的アイデンティティ 看護職を選択したことへの自負	P	看護観の確立	P	社会貢献の志向	P	必要とされることへの自負	P
1年	60.8（55.0～66.2）	n.s.	4.9（4.2～5.6）	** *	4.6（4.2～5.0）	*	5.5（5.0～6.0）	n.s.	4.2（3.8～4.8）	n.s.
2年	60.6（54.0～67.0）		4.8（4.2～5.2）	* **	4.4（4.0～5.0）	*** ***	5.5（5.0～6.0）		4.1（3.6～4.8）	
3年	61.1（56.0～68.0）		4.5（3.8～5.4）		4.4（4.0～5.2）		5.2（4.6～6.0）		4.2（3.7～5.0）	
4年	62.3（56.7～69.0）		4.6（3.9～5.6）		4.8（4.4～5.4）		5.4（5.0～6.0）		4.4（4.0～5.0）	

※ Friedman検定（多重比較：Bonferroni法）　n=58

※ *: $P<.05$, **: $P<.01$, ***: $P<.001$

Ⅴ．考察

1．専門領域別実習前後における職業的アイデンティティと社会的スキル

3年次秋学期から4年次春学期までに行われる専門領域別実習は，専門科目の「看護の展開」「看護の統合」にあたる科目であり，看護学の基盤を学習後，より専門的・発展的に看護学を講義・演習で学び，実践を通して様々な分野を総合的に学ぶ臨地実習である。

専門領域別実習前後の比較の結果から，実習後は職業的アイデンティティが総合的に高まること，受け持ち患者実習によるより専門的な実習体験が社会へ貢献したいという看護職選択への目的意識を高めたり，看護師像や看護の捉え方を変化させたりすることが示唆された。

著者[5]らの先行研究によると，初めての受け持ち患者実習となる基礎看護学実習Ⅱでは，実習後で「社会貢献の志向」が有意に得点が低くなっている。また看護職のやりがいだけではなく，仕事の大変さ，責任の重さ等を感じたり，患者との信頼関係の構築やコミュニケーションに不安を抱きやすい[9]とされているが，領域別実習終了後の看護学生を対象とした調査[10]によると，人生にはっきりとした使命と目的をもつ看護大学生は，看護観の確立や看護職としての成長への自信が高く，人間としての成長に自信がもてるとされている。これらのことから，本研究の結果は，各専門領域別の受け持ち患者実習を繰り返し体験したことで，自己の成長への自信が高まり，自分がなりたい看護師像をより明確化させる機会となっていたことが伺える。

また，本研究では社会的スキルは専門領域別実習前後ともに有意差が認められなかったが，実習後に得点が高くなっていた。このことは，薄井ら[11]がコミュニケーションは社会関係の中で経験的に身につけている技術であると述べているように，実習は保健医療従事者や患者・家族，教員やクラスメイト等との社会関係を経験することで，人間関係形成を高める教育効果が期待できると推察された。

さらに，KiSS-18は職業的アイデンティティと関連があったことから，社会的スキルは人間関係の形成に密接にかかわっており，職業的アイデンティティに影響することが示唆された。

2．学年別に異なる職業的アイデンティティ

「看護職を選択したことへの自負」は1年次が他の学年より有意に得点が高く，「看護観の確立」は4年次が他の学年より有意に得点が高くなっていた。いずれも，1年次より2，3年次で得点が低くなり，4年次で再び上昇するという結果であった。看護学生の職業的アイデンティティに関する先行研究では，入学直後の1年生が最も高く，2年生で大きく低下し，卒業時に再び高くなるとの報告があり[12][13]，この結果は，本研究の結果と同様の傾向である。

職業的アイデンティティは，看護師に対する憧れや関心という職業選択動機が影響し高まると言われている[14]。1年次は，一般的な看護師像と自分を適合させ，現実とは異なる理想的なイメージに基づいた職業的アイデンティティを形成する[15]。2年次は，医学的知識や領域別看

護学に関連する授業の割合が多くなったことを感じ，また実習時間が長くなり，看護という仕事に対してのやりがいと責任を感じる反面，看護の厳しさを実感し，イメージしてきた理想の看護と現実の違いを知る[16]とされている。また，3 年次秋学期から 4 年次春学期にかけては前述のように各専門領域別の受け持ち患者実習を繰り返し体験することで看護観を確立させ，自己の成長への自信を高めたものと考えられ，これらの要因が，本研究の職業的アイデンティティの学年別の得点傾向に影響を与えたものと推察される。

また有意差は認められなかったが，どの学年も「社会貢献の志向」の得点が最も高く，「必要とされることへの自負」の得点が最も低かったことは，高瀬ら[17] 竹本ら[18] の報告とほぼ同様の傾向であった。

しかし，本研究では，「必要とされることへの自負」が 1 年次よりも 2 年次で低くなり，3 年次 4 年次で高くなる傾向が認められたのに対し，藤森ら[19]の調査では，1 年生よりも 4 年生で有意に得点が低くなることが報告されており，本研究とは異なる傾向であった。高瀬ら[17]は，職業的アイデンティティは心理的要因や志望動機等の生活歴といった個人特性からの影響も関連していたと述べている。本研究では，入学前までの教育背景や志望動機，心理的要因，社会的背景等までは調査しておらず，学年別の職業的アイデンティティに影響を与える要因までは判断しがたい。

３．本研究の限界と今後の課題

本研究では，大学 4 年間の経時的な変化を確認するために調査を行ったが，教育課程や専門領域別実習の実習目標や内容，心理的要因や志望動機，社会的背景が結果に影響を与えた可能性がある。今後は，職業的アイデンティティに影響を与える要因についても検討し調査項目に加えた上で，教育課程の異なる教育機関の学生を対象とした調査を行い，比較検討して看護学生の特徴を明らかにしていくことが課題である。

Ⅵ．結論

本研究は，看護学生の社会的スキルと職業的アイデンティティにおける専門領域別実習前後および学年別による違いを明らかにすることを目的にＡ大学看護学科学生 58 名に 4 年間縦断的に質問紙調査を行い，以下の結論が得られた。

１．専門領域別実習前後では，職業的アイデンティティの「看護観の確立」「社会貢献の志向」が実習前より実習後で有意に得点が高かった。

２．社会的スキルは専門領域別実習前後で有意差が認められなかったが，実習後に得点が高くなっていた。また専門領域別実習前後ともに社会的スキルは職業的アイデンティティと関連があった。

３．職業的アイデンティティの学年別比較では，職業的アイデンティティの「看護職を選択したことへの自負」が，1 年次が他の学年より有意に得点が高かった。「看護観の確立」は，4 年次が他の学年より有意に得点が高かった。

謝辞

本研究に協力してくださった看護学生の皆様に心より感謝申し上げます。

研究助成情報

本研究は，平成 28 年度～平成 31 年度学校法人光星学院イノベーションプログラム（基金）研究等補助金の助成を受けたものである。

利益相反(COI)に関する開示事項はない。

引用文献

1）大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会：看護学教育モデル・コア・カリキュラムー「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標ー，文部科学省，2017.

2）看護学士課程教育におけるコアコンピテン

シーと卒業時到達目標，日本看護系大学協議会，15-31，2018.
3）志自岐康子，他：ナーシンググラフィカ 基礎看護学③　基礎看護技術　第5版，メディカ出版，p.14-23，2015.
4）庄司一子：子どもの社会的スキル，社会的スキルの心理学，川島書店，p.204，1995.
5）小沢久美子，久保宣子　他：看護学生の社会的スキルと職業的アイデンティティの形成に関する研究－基礎看護学実習Ⅰ，基礎看護学実習Ⅱおよびボランティア活動経験との関連－，八戸学院大学紀要，111-118，2018.
6）小沢久美子，久保宣子　他：基礎看護学実習における看護学生のコミュニケーションスキルと対人不安に関する研究，八戸学院大学紀要，1-12，2019.
7）堀　洋道　監修：心理測定尺度集Ⅱ KiSS-18（菊池　1988），170-174，2009.
8）藤井恭子，野々村典子　他：医療系学生における職業的アイデンティティの分析，茨城県立医療大学紀要，7，131-142，2002.
9）玉懸多恵子，小沢久美子，田口千尋：基礎看護実習における看護師へのインタビュー体験を通した学生の学び，第 36 回日本看護科学学会学術集会講演集，2016.
10）道廣睦子，安福真弓　他：看護大学生の死生観と職業的アイデンティティの関連，インターナショナル Nursing Care Research，18(4)，1-11，2019.
11）薄井坦子，新田なつ子：コミュニケーションの技術，基礎看護技術，73，医学書院，東京，1999.
12）藤縄理，水野智子　他：学生の専門職アイデンティティ確立を援助するための教育についての検討，埼玉県立大学紀要，5，105-110，2003.
13）柴田和恵，高橋ゆかり　他：看護学生の援助規範意識と職業アイデンティティー1 年生入学時と 3 年生の比較ー，日本看護学会論文集，看護総合，39，78-80,
14）松下由美子，柴田久美子：新卒看護師の早期退職にかかわる要因の検討ー職業選択動機と入職半年後の環境要因を中心にー，山梨県立看護大学紀要，6，65-72，2004.
15）小数智子，黒田裕子　他：看護学生の職業的アイデンティティ形成に関する研究（第ニ報）ー経年的変化から考える教育的支援ー，川崎医療短期大学紀要，27，25-29，2007.
16）宮脇美保子，藤尾麻衣子　他：4 年制大学における看護学生の職業的社会化－2 年次の学生を対象として（第 2 報）ー，医療看護研究，3(1)，64-68，2007.
17）高瀬園子　他：看護学生における職業的アイデンティティの文献レビュー，保健科学研究，9(1)，1-10，2018.
18）竹本ゆかり，大谷良子　他：東北地方にある A 大学看護学生の職業的アイデンティティと地元志向，北日本看護学会誌，22(1)，21-29，2019.
19）藤森由子，藤田絹代　他：地方私立看護系大学生における職業的アイデンティティと進路決定プロセスの関連，日本看護学教育学会誌，27(1)，53-60，2017.

執筆者紹介（所属）

小沢　久美子　八戸学院大学　看護学科　教授
久保　宣子　　八戸学院大学　看護学科　講師
切明　美保子　八戸学院大学　看護学科　講師
日當　ひとみ　八戸学院大学　看護学科　助教
古舘　美喜子　八戸学院大学　看護学科　助教
蛭田　由美　　八戸学院大学　看護学科　名誉教授